

願いの魔法

Strength

赤い死神

目次

プロローグ 幼き日の決意

第一章 新学期到来

プロローグ 幼き日の決意

「ねえ、しゅんちゃん」

都内のある幼稚園。子供達の賑やかな声が聞こえてくる園内で、そう呼びかけられた少年がムツと眉を顰める。

「ちゃん はやめろって、なんでもいってるだろ。男の子に ちゃん なんてつけるなよ。わかったか？」

「うん、しゅんちゃん」

言った側からの ちゃん 付けに、少年はムスツとしたまま、

「……なんだよ、ちさと」

と、返事をする。名前を呼び捨てにしたのは、彼なりの仕返しだった。

「もうすぐ七夕だね」

「知ってるよ、そんなこと。ジョーシキだろ」

つい先日、幼稚園の先生が言っていたことを覚えていた少年は、さも当然だと言わんばかりに尊大な態度で言う。

「しゅんちゃんは、たんざくに何ておねがいするの？」

竹に短冊を吊すと、短冊に書かれた願い事が叶う。

そんな先生の言葉を純真な子供らしく信じ込んだ少女が、心と同じようにキラキラと光る瞳で少年を見つめながら訊ねる。

「お前、あんなのしんじてるのか？ かなうわけないだろ」

馬鹿にするような少年の言葉に、しかし少女は子供心をそのまま投影したような言葉を返す。

「そうかなあ？ もしかしたら、かなつかもしれないよ。ねえ、しゅんちゃん。もしかなくなつなら、しゅんちゃんはどうなおねがいをするの？」

「そうだなあ……大金持ちになってあそんでくられますように、だな。そうなつたら、おもちゃやプラモを買いほっただいだからな」

それに続けて「……って、そんなのかなうわけないけどな」と、少し照れたように付け加える。

「それで、ちさとは何をねがいますんだよ」

「わたし？ わたしはねえ……」

「なんだよ」

「しゅんちゃんと、ずっといっしょにいられますように、っておねがいますよ」

「なっ……」

少女にとって、それは童心から出た単純で可愛い発言だったのだらう。

だが、少年は少女に比べて早熟だったのか、顔を真っ赤にしながら固まってしまった。そんな少年に、少女が更に追い打ちを掛ける。

「わたし、しゅんちゃんのこと、大好きだから、ずっといっしょにいたいんだ。ねえ、しゅんちゃんは？」

「な、何がだよ」

自分が動揺していることを相手に知られないように、精一杯の強がり少年は訊ね返す。

「しゅんちゃんも、わたしとずっといっしょにいたい?」

「べ、別にボクはどっちでも……」

真つ赤な顔で、少年は少しだけ嘘をつく。本心では、少女と一緒にいたいと、そう思っていた。だが、子供心に住む自尊心^{プライド}と、気恥ずかしさから、少年はそれを素直に伝えることができなかつたのだ。

「じゃあ、しゅんちゃんもおねがいしようよ。わたしといっしょにいられますようにって。天の川は広いから、二つべらいならおねがいでいいよ。だいたいじょうぶだよ」

「バーカ。そんなぶつによくばつたら、どっちもかなわないって絵本に書いてあったぞ」

「そうかなあ……」

ついさっきまでニコニコと笑っていたはずの少女は、急に残念そうに顔を歪める。

「……わかつたよ」

そんな少女を見て、少年は仕方なさそうに口を開いた。少しだけ、唇を緩ませながら。

「大金持ちはいいよ。ボクもちさとどいっしょにいたいって書いてやるよ」

「ホント?」

「ホントだつて。ほら、さつさと書いて、かざりに行こうぜ」

「うん!」

元気よく返事をする少女と一緒に、少年は幼稚園の教室に戻っていく。

そして二人は、同じ願いを竹に吊した。

『ちさととずっといっしょにいられますように』

『しゅんちゃんといっしょにいられますように』

少女は嬉しそうに、少年は照れながら、二人は並んで短冊を竹に吊したのだった。

そしてこの時、二人はこの願いが叶わぬ事など、夢にも思っていなかった。

二人は小さな時から一緒に、それはこれからも変わらないと、

そう、思っていた……

「うそつき!」

二人が短冊を吊した日から、一週間程経った今日はちょうど七夕で、願い事が叶うはずの夜。

だが……少年の隣に少女はいない。

「うそつき!」

少年はもう一度そう叫ぶと、少年が吊した短冊を乱暴に引きちぎり、代わりに持っていた別の短冊を吊るした。

別の願い事の書かれた短冊を。

その短冊に書いた願いは、

『つよくなりたい』

だがそれは、七夕の願いを叶えてもらうために吊したわけではない。

少年はもう痛いほどに知っていた。短冊を吊す竹に、何の力もないことを、少年は知っ

ていた。

少年は竹に向かって言う。いや、叫ぶ。

「お前の力なんかかりない！ オレは」

短冊を竹に吊したのは、願い事を叶えてもらうためではない。少年の願いを、自分自身に刻み込むため。そして、それを何の力もない竹に見せつけるためだった。

「オレの力だけでつよくなってやる！」

少年は宣誓する。

無力な竹に向かって。そして……

無力な、自分自身に向かって。

第一章 新学期到来

つららかなある春の日の朝。ベッドで眠る少年を照らすように、窓からは眩しいばかりの陽光が差し込む。眩しさに寝返りを打つが、少年の目が開くことはない。天然の目覚まし時計では、少年を起こすことができないらしい。

春眼覚を覚えず、の言葉を地で行く少年は気持ちよさそうに、眠りこけている。

だが、人間というのはいつまでも眠っていることをおいそれと許される生き物ではない。く、

「ほら、俊介！起きなさい！」

今日もまた、彼 俊介を起こすために彼の母親が部屋に入ってくる。陽光を穏やかな春風に例えるなら、彼の母親は暴風である。荒々しく、とは言わないが、声を大きくし俊介を呼び、体を揺する。

「んっ……んあ？……んだよ、母さんかよ……」

さすがにそれを無視して眠り続けられるほど図太くはなく、少年 俊介は眠たそつに瞼をこすりながら目を開けた。

『母さんかよ』じゃないでしょ。ほら、もう朝なんだからさっさと起きて、学園に行く準備をしなさい」

「はいはい……わかってるよ」

まだ意識は半分眠ったまま、おざなりに返事をする。

「まったく……もう朝ご飯できてるからね。早く、着替えて降りてきなさい」

「うー……」

やや呆れながら、母親が俊介の部屋を出て行く。一人残された俊介はベッドの上。ということとは……

「二度寝のチャンス！」

と、なるわけだが、それを実行すると遅刻はほぼ確実なので、さすがの俊介も自重する。

何せ今日は、彼の通う学校の始業式なのだ。別段真面目というわけでもない俊介も、初日から遅刻というのは嫌だったのか、おとなしくベッドから出てくる。

「ふわ……あふ……着替えるか」

パジャマを脱ぎ捨て、ハンガーに掛けられた学校の制服を着込む俊介。真っ白なブレザーと、真っ白いズボンという格好で、俊介は部屋をでて台所へと向かう。

「おはよう」

「ああ、おはよう。俊介」

先にテーブルに着いていた父親に挨拶をして、俊介は父親の対面の席に腰を下ろす。父親は読んでいた新聞をテーブルの上に置いて、俊介の顔を見る。

「春休みももう終わりか」

「ああ、今日から新学期だ」

「俊介ももう高校二年生か……月日が経つのは早いものだな」

「年寄り染みた発言だな。親父ももう年か？」

「馬鹿言え。まだまだ現役だ」

からかうように言う俊介に、父親は少しムキになって言い返した後、思い出したように

口を開いた。

「それより、俊介。お前、一年の時、実技の成績が一番だったってな」

「今更だな……成績表もらったの、もう一ヶ月も前だぜ？ まっ、そつだ。一番だぜ。今なら親父にも負けられないんじゃないか？」

自慢げにそう言つてのける俊介に、父親は「だが」と前置きして攻勢に転じる。

「勉強のほう疎かになっているよつだな」

「むぐ……」

一年の終業式の時にもらつた、低空飛行の通信簿を思い出して、俊介は僅かに苦い顔をする。だが、それも一瞬のことですぐさま言い返す。

「い、いいんだよ、オレは。実技で一番取つてんだから。勉強なんざできなくなつて、別にかまわねえよ」

「やれやれ、そんな調子じゃまだまだ父さんに勝つのは無理そつだな」

「なんだよ。そんなこというなら、オレと勝負してみろよ。勉強なんて出来なくなつて、オレは親父に負けねえよ。なんなら、今すぐオレと勝負してみるか？」

「残念だが、父さんはもう出勤の時間だ。お前だつて、新学期早々遅刻するわけには行かないだろ？ 勝負はまたの機会にお預けだ」

「ちゅ……」

煙を巻いて逃げる父親に向かつて、俊介は舌を打つ。

(くそっ……いつか見てるよ。オレは強くなつてんだよ、親父)

「いつてきます」

朝食を食へ終えた俊介は、鞆を持って家を出る。向かう先は、彼の通う学校である。

朝方の道には人の姿はあまりない。たまに見かける、井戸端会議をしている主婦の声や、雀の囀る音ぐらいしか聞こえない、いつもと変わらない静かな登校

の、はずだったのだが。

「その手を放しなさい、無礼者！」

静けさをぶち壊すような甲高い声が響く。

(こんな朝っぱらから騒がしい奴がいるな)

などと思いつながら、その声を無視して歩いていこうとする俊介だったが、

「へへっ、いいじゃんお嬢ちゃん。お兄さん達とちよつと付き合つてよ。そこでお茶するだけでいいからせ」

一体何を騒いでいるのか、非常によくわかる男の声を聞いて足を止める。家屋の塀と塀に挟まれた細道に、俊介と同じ年頃と見られる少女が一人と、見るからに柄の悪そうな男二人。

(どうでもいいけど、こんな時間にお茶するところが開いているのか?)

ちなみに、現在時刻は丁度午前八時だ。喫茶店どころか学校もまだ始まっていない。

俊介がそう激しくどうでもいい疑問を浮かべている間にも、男女のやり取りは続いている。

「放しなさい！ 汚らわしい！ あなたごときが、この私わたくしに触れていいと思つて？」

「んだと、このアマ！ 人が下手にでてりゃ、付け上がりやがつて！」

(なんだか揉めてるな。やれやれ)

肩をすくめながら、俊介は足を止める。

「つたく、こんな朝っぱらから盛るなよな。さすがに、この状況放置して行くのも後味悪いし。まっ、さっさと片付けりゃ学校にも間に合うだろ」

そう結論を出して、俊介は男女三人の方に向かって一步を踏み出し、存在を主張するように声を上げる。

「おい、何やってんだよ、お前ら。そいつ嫌がってんじやねえか、いい加減離してやれよ」「ああん？　なんだ、このガキ。何かツッコけてんだよ」

声を掛けたことで、ようやく俊介に気づいたのだおる男達は、声を低くして脅しかける。気の小さい者なら、尻尾を巻いて逃げ出すような男のガンつけに、正面から相対した俊介は、

「うわっ、こいつら近くで見るとやたらとピアスつけてるな。耳に鼻に口もか。何考えてんだ、こいつら？　数でも競ってんのか？」

平然とまた、どうでもいいことを考えつつ、男を無視する。

「おうおう、何黙って人のことジロジロ見てんだよ。あん？　ビビってんのか？」

「つか、それだけ体に穴開けて痛くないのか？　……ああ、そうか、こいつら馬鹿だから痛覚ないのか。そいつは便利だな」

「んだと、コリア！　誰が馬鹿だ！　ナメてんのか！」

「あ、オレ声に出してたか？　わりいな、つい本音がポロツと」

「上等だ！　覚悟はできてんだろっな!!」

憤る男は、俊介の襟首を掴み、殴りかかろうと腕を振り上げるが、

「汚ねえ手で触ってんじやねえよ！」

俊介はその手を弾いて、ホルダーから取り出した二丁の拳銃を男の額に当てる。回転式拳銃と呼ばれ、火薬を炸裂させて銃弾を飛ばす兵器の引き金を、俊介は躊躇うことなく引き絞った。

「な　がっ!？」

瞬間、男の体が吹き飛び、土煙を上げながら地面をこする。白目を剥いて地面に横たった相方を見て、何が起ったかわからずにいた男が呆然と倒れた男を見下ろしている。

「な、な、な、何しやがった!？」

先に現実に帰ってきたのはナンパ男の片割れの方だった。見ていていつそ可笑しくなるほど動揺しながら、俊介に問いかける。

「何をしたも何も、オレは引き金を引いただけだぜ」

俊介は馬鹿にするように不敵に笑って言うのける。

「オレの魔術媒介であるこの銃のな」

魔術媒介。それはその名のとおり、魔術、というか魔法を使う際の媒介となるものを指す。言わば、魔法使いにとっての杖のような者だ。

魔法帝国日本。

俊介の住むこの国の名前であり、その名の通りこの世界で唯一魔法を使うことの出来る、『日本人』の住む国の名前である。

いくつもの国と、いくつもの人種が混在するこの世界でただ一種、魔法を使うためのエネルギーとなる魔力を、生まれながら体内に宿し、他国ではファンタジーに過ぎない魔

法　がこの国にはあった。

その力を振るい、いくつもの戦いを勝ち抜き、そうして日本はこの世界に存在する全ての国の頂点に立つこととなったのだった。

俊介はその日本に住む、『日本人』であり、杖の代わりに銃を使う変わり種の魔法使いなのだ。

「んで？」

俊介が銃を指で弄びながら男に訊ねる。

まだやるのか、と。

「な、ナメンじゃねえっ！」

男は逃げ出さずに、手のひらの上に炎の塊を作り出す。それを見て、俊介は嘲るように鼻で笑った。

（火系統の魔法使いか。媒介もなしで、必死で使う魔法がそんな程度かよ……相手にならねえな）

魔法にはいくつか属性があり、俊介の知る限り五つの属性に分けられる。火、水、風、土、光の五属性だ。この属性は、人によって生まれた時に決まっているもので、後天的な努力によって得られない完全なる先天的な才能だ。

「腰が引いてんぞ。ビビッてんのか？」

「う、うるせえ！　これでもくらいやがれ！」

男は手のひらの上に浮かべた炎の魔法を、投げるように俊介に向かって放つ。

「やれやれ」

相手にするのも馬鹿らしいと言わんばかりに、俊介は肩をすくめた後、向かってくる魔法に向かって引き金を引いた。

銃口から、俊介の魔力で作られた光の弾丸が放たれ、炎の塊が貫き、そのまま男に向かって一直線に飛んでいく。

「ぐあっ!？」

光の弾丸を脳天に受けた男は、呻き声を上げて地面に倒れた後、体をビクビクと痙攣させる。とりあえず、生きてはいるようだが、しばらく起き上がることはないだろう。

「大丈夫か？」

倒れた男二人を一瞥した後、関心を無くした俊介は成り行きに驚き戸惑っている少女に声を掛ける。

「え……あ……」

うまく言葉が出てこないのか、口をもごもごと動かす少女。俊介は怪我がないことだけ確認して、

「んじゃ、オレは学校行くから、じゃあな」

俊介は少女に背中を向けて、歩いていこうとする。もう自分の役目は終わったと言わんばかりに。

「あ、あのー！」

その背中を、焦ったような少女の声が叩く。何事かと振り返った俊介に、少女は頭を下げて言う。

「その……助けてくださって、ありがとうございます」

別に。大したことはしてねえよ。また変な奴に絡まれる前に、学校なりどこへなり行っ

た方がいいんじゃないか？ まっ、こんな朝っぱらから盛ってる奴なんざ、そうそついな
いだろうがな」

横たわる男の体を足で小突きながら言う俊介に、少女はおずおずと訊ねてくる。

「あの……あなたのお名前は……？」

「オレか？ オレは、かぞみしゅんすけ風見俊介」

聞かれたからと、とりあえず質問に答えた後、「んじゃ、オレはもう行くからな。次からは気をつけるよ」

そう言って、俊介は今度こそ少女に別れを告げて歩き出す。今度は呼び止める少女の声は聞こえなかった。

* * *

「風見……俊介様……」

去っていく俊介の後ろ姿を見送りながら、少女は熱に浮かされたように頬を赤め、愛おしげに俊介の名前を呟く。

「学校……あの制服は、確かお兄様と同じ」

「アメリカ様！」

物思いに耽る少女に、黒服を着たサングラスの男性が声を掛ける。肩を僅かに上下させ、息を弾ませているところを見ると、少女を捜すために走り回っていたのかもしれない。

「勝手に出歩かれては困ります！ 一体何のために私があなたの護衛を」

「浅葱」

従者のお小言を、主の傲慢さを持って封じ、少女はその口で命令する。

「今すぐ、アーレント魔法学園の風見俊介様の身元を調べなさい」

「は」

「聞こえなかったのかしら？ 今すぐ、風見俊介様の身元を調べなさいと言っているのよ。どこに住んでいるのか、何をやっているのか、とにかくどんな人なのかをすぐに！」

「し、しかし、私はお嬢様をこのままカトレア学院まで」

自分の役目に忠実であらんとする浅葱に、少女は有無を言わさぬ口調で言う。

「浅葱。私は調べなさいと言ったのよ」

「……了解しました」

繰り返される命令に、浅葱は渋々ながら首を縦に振る。少女は満足そうに口元を弛める。

「全く、最初からそうやって素直に私を言う事を聞けばいいものを、頭が固いんだから」

「そうはおっしゃられますが」

「浅葱」

「……失礼しました。直ちに」

少女に傳く浅葱。

だが、少女の瞳にはもう浅葱の姿は映っておらず、瞳に焼き付いたのは、先程の俊介の姿だけ。

少女は願う。知りたいと。自分を助けてくれた人のことを知りたい。どんな小さな事

でもいい。

「風見、俊介様……」

* * *

多少トラブルはあったものの、いつもとそう変わらない時間に俊介は自分の通う学校、アーレント魔法学園へと到着する。校門の周りに植えられている満開の桜から舞い散る花びらの下をくぐって、俊介は園内へと足を踏み入れた。

「さて、と。オレのクラスはどこかな、っ」と

俊介はクラス表の貼られている掲示板へと向かって歩いていくと、同じ目的の学生達が山を作っていた。皆考えることは同じと言っことだろう。

「混んでるな……」

一学年丸々の生徒が一つの掲示板に集まるのだから仕方がないことなのだが、それだけの人混みを抜けてクラスを確認するのは誰がどう考えても面倒だ。だが、残念ながら見ないことには自分がどこのクラスなのかわからない。

どうしたものかと考える俊介。その肩が、不意にポンツと叩かれる。

「風見。おはよう」

「おつ、健一。おはよう」

俊介が振り返ると、去年同じクラスだった、中田健一の姿があった。

「俺もいるぞ、シユン」

「うおつ、レイ」

声に慌てて振り返ると、いつの間にか隣には健一と同じく、去年からの付き合いである

藤原レイが立っていた。ちなみに、シユンというのは俊介の渾名である。

「俺の気配に気付かないとはな。もし俺が暗殺者なら、お前はもう死んでいるぞ」

「暗殺者に狙われるような心当たりなんてねえよ」

レイのいつもの戯れ言を適当に流しつつ、俊介は掲示板の人ごみを指差す。

「お前らはもう見てきたのか？ 自分のクラス」

「ああ、見てきた。俺達三人同じクラスだったぞ。全員？ Cだ」

「腐れ縁と言っ奴だな。喜ぶがいい」

「去年からの付き合いで腐れ縁っていつのか？」

「とりあえず、教室へと向かおう。こんなところで立っても仕方ないからな」

「無視かよ」

俊介のツッコミも華麗にスルーして、レイは校舎の中へと入っていく。残された健一と俊介は顔を見合わせた後、その後が続いて校舎の中へ入っていくのだった。

三人がCの教室へとたどり着くと、そこにはすでに何人かの学生の姿があり、それそれ適当な席を占拠して雑談に興じていた。俊介達もまた、それに倣うように適当な席に腰を下ろした。

「風見、今日も付き合ってもらっていいか？」

と、健一がカードの束をポケットから取り出して訊ねる。取り出したカードは全部で二

十二枚のタロットカードだ。

「占いか？ まあいいけど、別にオレが何かするわけじゃないだろ。」

「まあ、そうなんだがな。一応、確認を取っておこうと思っただけだ」

「律儀な奴だな、中田は。俺ならシユンの同意など求めずに、勝手にやるものを」

「お前はもう少し遠慮つてものを覚えろよ」

「無論、覚えているぞ。実行はしてないがな。はっはっは」

「じゃあ、やらせてもらうぞ、風見」

高笑いするレイは軽く無視して、健一はタロットカードの山を無造作に放り投げる。カードが宙を舞い、ひらひらと地面に……落ちることなく、二十二枚のカードは健一を囲むように輪を作り、回転し始める。

魔法とタロットカードを組み合わせた健一オリジナルの占い方法。本人曰く、手法がまだ未完成らしく、俊介を実験体にして手法を確立させようとしている最中らしい。

ちなみに、レイは「俺は占いなど信じん！」とバツサリと言い捨てて協力しなかったため、現在健一の占いに付き合っているのは俊介だけだった。

健一の周りを回転するカード達。ほどなくして、その中から一枚のカードが自分から輪を抜けて健一の前に導き出される。

「正位置の運命の輪が……そうだな、新しい出会いのチャンスと言ったところか」

「出会い……ねえ」

俊介はふとついさっきの出来事を思い返す。朝っぱらから盛っていた男一人と、絡まっていた少女。あれは一応出会いになるのだろうか？

「心当たりがあるのか？」

「さては登校中にトーストを加えた転校生とでもぶつかったな。おいしい奴だな、お前は」「そんなピンポイントな出来事が現実にあつてたまるか。今日から新しいクラスなんだから、初めて顔合わせる奴もいるだろうし、出会いってそういうことだろう？」

今ざっと周りを見回しただけでも、知らない顔が結構いる。これも一つの出会いと言えるだろう。

「ふむ、まあそういうことにしておこう」

「いちいち含みのある言い方すんのやめるよな」

「気にするな」

「そうさせてもらうぜ……」

レイの戯言にいちいち付き合っていると酷く疲れるため、俊介はそれ以上何も言わず会話を閉じる。

「まあ、新しい出会いもいいが」

タロットカードをポケットにしまった健一がスッと手を差し出す。

「今年もまたよろしく。藤原。風見」

俊介とレイはお互いに顔を見合わせた後、

「おつ、よろしくな、健一」

「ふふっ、お前達となら、退屈しない一年が送れそうだな」

健一の手の上に自分の手を重ねるのだった。

チャイムが鳴り、教室に入ってきた教師の指示で体育館に移動した俊介達は、恒例の長い話を聞き終えて、再び教室に戻ってきていた。

「ふっ……無駄に疲れたな」

どうせ誰も聞いていないような長話を、半強制的に聞かされ、少々ぐったりしながらため息をつく俊介。もっともそれは俊介だけの話ではなく、教室のあちこちで見られた。

解放感からか、騒がしくなる教室。しばらくしてやってきた担任が、簡単な連絡事項を告げると、本日はそれでお役御免と言わんばかりに、教室から生徒達が流れ出していく。

「シユンよ。お前はこれから暇か？」

その流れに乗るように、鞆を持った俊介にレイが声を掛けてくる。

「まあ、暇っちゃ、暇だな。何かあるのか？」

「何、お互い無駄話を長時間聞かされたんだ、その鬱憤を晴らしに行かんかと思ってな」

「ようするに、遊びに行こうって話だな」

「そういうことだ」

レイのいちいち回りくどい台詞の要点だけを抜き出す。

「健一も一緒か？」

「いや、俺はパスだ。少し用があるんでな。二人で楽しんできてくれ」

「そうか。んじゃ、また明日な」

「ああ、また明日」

そう言っ、健一はまだ放課後の賑わいが残る教室をさっさと出て行く。

「フラれたな」

「まっ、用事じゃしょうがないだろ。んで？ どこに行くんだ？」

「撞球でどうだ？」

「撞球？ なんだそれ？ バスケか？」

「それは撞球だ。撞球と言つのはだな、棒で珠をつついて穴に落とすと言う、大人の遊戯の事だ」

「……ああ、ビリヤードな。だったら最初からそう言え。わざわざ分かりにくい言い回しはやめろ」

「善処しよう」

レイはふっと薄く笑って鞆を手に取り、俊介を促して教室を出て行く。

下校する生徒達の波に乗って学校を後にして、二人はビリヤード場に到着する。ラジオから流れる、古めのバラードを背に、お互いキューを手に、ビリヤード台の上を睨んでいた。

ルールはナインボール。面倒な点数計算は省き、一番から順番に玉を落としていき、九番を先に落とした方の勝ちというルールで、二人は自分の腕前を競い合っていた。

……のだが、

「くそっ、また負けかよ！」

9番のボールがまたポケットに吸い込まれていく光景を見て、俊介が苛立ちを露わにする。これで俊介の三戦三敗が確定していた。バックで流れるバラードが、俊介の背を慰めるようにささる。

「また俺の勝ちだな」

ボールがポケットに落ちるのを見届けてから、レイは不敵に笑う。その余裕の笑みが俊介を余計に苛立たせる。恐らくそれをわかっていてやっているのだから、尚更性質が悪い。

「もう一回！ もう一回勝負だ！」

「やれやれ、懲りない奴だ。まあいい、何度でも受けてたこと！」

九つのボールを菱形に並べ、その正面に白一色の手球を置き、俊介はキューを構える。「このっ！」

キューを抑える三本の指。その間を抜けて、俊介はキューを力一杯前に突き出し手球を弾く。込められた力に相応しいだけの速度で、手球は菱形に並べられたボールの群れに向かって転がっていく。少して、ボールとボールのぶつかる高い音が鳴って、九つのボールがそれぞれ台の上に散らばる。

「チッ」

残念ながら、散らばったボールは一つとしてポケットに落ちず、舌打ちをしながら俊介はレイに場所を譲る。

「むむ」

レイは手球と一番のボール、それと台上を一瞥した後、キューを構え、手球を打ち出す。打ち出されたボールは、真っ直ぐ他の球の間をくぐるように一番のボールへとぶつかる。ぶつかったボールは、まるで穴の方に吸い寄せられているかのようにポケットの中へと消えていった。

「クソッ」

「どうした？ まだ一番が落ちただけぞ」

「わかっているっての」

余裕の表情を浮かべるレイとは対照的に、負けが込んでいる俊介は表情が険しい。

（今に見てる。今度こそオレが勝ってやる）

とはいえ、ボールを落としたので次もレイの番だ。続いて、2番と3番ボールが穴に落ち、レイは次の得物を狙う。

（おいおい、まさかこのまま順番が回ってこないとか言うオチはないだろうな……）

順調にボールを落としていくレイを見てると、そんな不安に襲われてくる。

だが、その心配は杞憂に終わったらしい。

「むっ……」

手球を突いたレイが眉を顰める。4番ボールは手球にぶつかり、コーナーポケットに向かって真っ直ぐ転がっていくが……穴に落ちる手前でストップしてしまふ。どうやらパワーが足りなかったらしい。

「見誤ったか……まあいい、シュンにも順番を回してやらないといけないからな」

「言ってる。ここからオレの怒涛の反撃が始まるんだよ」

まずは4番ボールをと、俊介はキューを構える。

（すぐそこに穴があるんだから、突き落としてやるだけでいい。楽勝だぜ）

構えたキューを力一杯押し出す俊介。手球はまたも、勢いよく転がっていく。

「よしっ！ もらった！」

手球が四番ボールに当たる。そして、四番ボールは真っ直ぐと穴の中に

消えずに、ポケットの脇にあるクッションにぶつかって明後日の方向に転がって

行ってしまう。

「なっ!？」

しかも、

「あー……!？」

4番ボールに当たって弾かれた手球が、いくつかのボールにあたりながら、その方向を変えていき、最終的に4番ボールではなく手球がポケットへと落ちていく。いわゆるファールと言う奴だ。

「どうした？ 怒涛の反撃が始まるんじゃないかったのか？」

落ちてしまった白い手球を握りながら、嫌味ったらしくレイが笑う。

「ちょっと手が滑っただけだ。次こそは……」

俊介が負け惜しみを言っているうちに、レイは手球を四番ボールとポケットの一直線上に配置する。俊介がファールをしてしまったので、レイは手球を好きな場所においてそこから打つ事ができるのだ。

絶好のポジションから突き出された手球は、四番ボールを真っ直ぐにポケットに向かって転がしていく。

その後、何度か俊介の番は回ってきたものの、満足にボールを落とす事もできないまま、そのゲームもレイの勝利で幕を閉じたのだった。

「くっそう……」

ビリヤードを終えて、外に出た俊介の口から一番に出た言葉がそれだった。あの後、何度もレイに挑み続けた俊介だったが、結局ただの一度もレイに勝つことは出来なかったのだ。

「お前は力任せに打ちすぎだ。勝ちたいのならもう少し頭を使え」

「うっせえなあ。頭を使うのは性に合わねえんだよ」

「ふむ。お前らしいな」

どうでもいいのかは敢えて聞かずに、俊介は空を見上げる。空はすでに、夕暮れを過ぎて夜を迎えていた。

「それでは、今日はこの辺でな」

「だな。もう大分暗いしな」

季節は春。日が暮れるのが早い、ということではなく、俊介達がそれだけ長い間遊んでいたと言っことなのだろう。道は街灯に照らされ、帰宅時間なのかちらほらとスーツを着た大人達の姿が目につき始める。

「では、また明日な」

「おう、また明日」

レイと別れを告げて帰路へと着く俊介。帰り道に通る住宅街では、塀の向こうに見える家屋から回響の音が聞こえてくる。

「ちょっと遊びすぎたか……」

行く先を照らす街灯の光を見上げながら呟く。

もう高校生と言っこともあって、多少遅くなったところでそうとやかく言われることはないだろうが、遅くに帰っ方がいい顔をされることはまずないだろう。場合によっては夕飯抜き、なんてオーソドックスな罰もあるかもしれない。

(……それは、勘弁して欲しいな)

ほんの僅かに帰る足を速くする俊介。俊介の視界を流れる周りの景色も、ほんの少しだけ速度を上げる。

だが、

「……」

視界の中を絶え間なく続いてきた家屋の群れ。その中にポツンと現れた、小さな空き地を目に留めて、俊介はつい足を止め、何も無いその空き地をいつい眺めてしまう。この場所が空き地になった時から変わらぬ……習慣のようなものだった。

その空き地に、あつたはずの家を思い浮かべ、俊介は視線を高く上げる。いつの間にか、その手は汗が滲むほど強く握りしめられていた。

この場所が空き地になったのは、もう十年以上前のこと。俊介がまだ年端もいらない子供だった頃のことだった。次から次へと新しい物が頭の中に入ってくる年頃で、こんな住宅街の一角にある家屋が空き地になる出来事を、いちいち覚えているはずはない。

普通なら。

だが、俊介は覚えている。いや、忘れられなかったというのが正しいのだろう。かつてここで起こった事件を。その事件のせいで失ったものを、いなくなってしまった人のことを。

「……ちやうど」

その、名前を……

